

金曜日からの死者

◆水曜から木曜

坪井さんの卓上カレンダーには、今週の金曜日に大きく目立つように派手な赤い丸がついていた。

それに気づいたのはついさつき、一緒に残業を始めて5時間を経過した頃だった。

「シャラララ〜シャララララ〜」

坪井さんと2人きりのオフィスには、日曜日からの使者がエンドレスで流れ続けている。

2人は先週急に我が社のCM担当にさせられてしまい、締め切りを守らない制作会社のせいで、毎日徹夜に近い状態で残業させられていた。

「あいつらが修正出してくるのこっちは待たなきゃいけないし、そこから明日のプレゼン資料つくんなきゃいけないなんて、やってらんないっすよね」

修正が返ってくるまでの待ち時間。直人はあまりにも暇だったので、斜め前の坪井さんの席まで行って話しかけた。

突然話しかけられたことにびっくりしたのか坪井さんは、ビクッと体を震わせた。あまりにも驚いたのか、予定を書き込んでいた卓上カレンダーを落としてしまっている。直人がカレンダーを拾おうとすると、今週の金曜日に大きな丸が書かれているのを見つけたのだった。

「金曜って打ち上げとかありましたっけ？」

思わず坪井さんに聞くと、

「そんなじゃないよ」

と目を泳がせながら怯えた様子で答えた。

締め切りはその前日、木曜の朝10時なのに、なんなのだろう。噂は聞かないけどデートなのかもしれない。金曜日の坪井さんの予定に頭を巡らせ始めた時に、「ピロン」とメールの着信音になる。

「あ！修正来ましたね」

急いで開いて動画を確認する。これを終わらせて、一瞬でも早く帰りたい。

「ぎっけんなよ！！」

「はあ」

直人の怒りの声と、坪井さんの落胆のため息が出てくるのはほぼ同時だった。依頼した修正点が全く直ってないままの動画を見て、一瞬にして直人の頭の中は制作会社への怒りに染め上げられたのだった。

◆金曜日

CMの案件は一応木曜に締め切りを迎え、なんとか終わらせることができた。あまりにもこ

こちらの指示を聞かない制作会社と、残業はしないのに無茶な指示だけ出してくる上司の間に板挟みになり、何度もブチギレそうになったのだが、坪井さんがその度、頭を下げ、なんとか直人もブチギレずに済んだのであった。

それでも下っ端の直人には今日も仕事が回ってくる。今夜も当たり前のように残業だった。斜め前には机に向き合っている坪井さんの背中が見える。もう見慣れた光景だ。直人よりも坪井さんは遥かにベテランだが、気の弱いこともあり課長から下僕のように扱われている。「いい人なんだけど、この人みたいにはなりたくないな。」と、直人は内心思っていた。

「坪井さーん、今日は終電までに帰りたいですよね」
暇つぶしに話しかけてみると、ビクツと坪井さんの背中が椅子の上で跳ねた。この前のカレンダーの件といい、反応が大きすぎて少し笑ってしまう。

「な、なんだ。山下君は残っていたのか。」

「そうなんすよ。また課長から仕事押し付けられちゃって。お互い大変っすよね」
連日の残業が終わったのにも関わらず、仕事を押し付けられる。そんな共通した可哀想な状況に、直人は仲間意識を感じずにはいられなかった。

話しかけられて、みるからに動揺していた坪井さんは突然じつと直人を見つめる。

「山下君。申し訳ないからもう先に帰りなさい。」

「はい？」

思わず、直人は「は？」と言ってしまいそうだった。それくらい、突拍子もない坪井さんの発言。残業しすぎて頭がおかしくなって来たんじゃないか。

「いいから今日は帰りなさい。」

もう一度、坪井さんが言う。その目は、真剣に直人を見つめており、冗談で言っている訳でもなさそうだ。

「いや、でも、い、」

「いいから、申し訳ないし帰ってくれないか。仕事が残っていても、僕が課長に山下君は体調が悪く、先に帰ったと言っておくから」

あまりにも真剣に「帰れ」と言ってくるので、坪井さんの迫力に気圧されて、直人は帰ることにした。一体、彼があんなに真剣に頼んでくるなんて何があるのだろう。

「ピロン」

坪井さんの態度に引っかけかきながらビルの出口に向かっていている時、ちょうどラインの通知がきた。なんだろうと思って開けてみると、「金曜日だし飲もうぜ」と、友人からのラインが届いている。

「おっ！ラッキ〜」

ラインを見た瞬間に直人の頭の中はビールでいっぱいになり、坪井さんのことなどもう片隅にもないのであった。

◆金曜日から土曜日

「あーだいぶ飲んだな」

連日の疲れもあり、「終電で帰るわ〜」と言って先に出て来た直人は、ふわふわした気持ちでホームにくる電車を待っていた。金曜日の終電は必ずと言っていいほど時間通りにこない。それがわかりきっているから、直人は電車の検索も、時計を見ることもしていない。ただ、ひたすらにホームのベンチに座りながら電車を待つのであった。

「ピンポンパンポン」

急に駅のアナウンスのベルがなる。反射的に、電車の遅延だとわかり、チツと舌打ちをする。人身事故なら最悪なのだが・・・

「先ほど、川崎駅で人身事故が起きたため、本日12時28分に到着予定の電車は運転を停止しております。」

最悪だ。最後まで聞く前に、直人はさっきまで一緒に飲んでた友人にラインを送る。

「おわった、電車止まった。」

「まだいんだろ？そっち合流するわ」

どうせなら女の子いてくれればよかったのに。友達が開いた飲み会にケチをつけながら、彼らがいる店へまた戻って行った。

◆月曜日

月曜日は憂鬱だ。さらに、金曜日に頼まれた仕事を終わらせる前に、坪井さんに「帰れ」と言われたので、余計に気がおもしろい。少しでも終わらせておこうと、直人はいつもより一時間早く、会社に向かっていた。

「ドタドタドタ」

出社すると、オフィスが何やら慌しい。いつも遅れて出社してくる課長ももう自分のデスクに座っていた。表情は遠くから見てもわかるくらい真っ青で虚ろな顔をしている。

「おはようございまーす。」

すれ違う社員に挨拶をしても、ほとんどが返事ないか、「ああ」と適当に返されてしまう。一体何が起きているのだろうか。

「課長、おはようございます」

「ああ、、、」

直人は意を決して課長に話しかけたものの、届いているのかわからないような虚ろな返事を返された。こんなに元気がないこの人を見たのは入社以来初めてだった。

「あの、申し訳ないんですけど、金曜日に言われていた仕事なのですが、体調が悪くなってしまう、終わらせる前に帰ったため、まだ全部は終わっていません。すいません。」

「ふざけんな!!」と言う怒号と共に課長の机の上の書類ごと投げつけられる。それならまだいい方で、机にお茶が乗っているからそれを浴びせかけられる。それか、、、

「どうやって怒られるのだろうか。」直人の頭の中にはもう、それしかなかった。

「ああ、、、」

しかし課長は、虚ろな目で一言つぶやいただけだった。あまりにおかしすぎる。絶対に何かあったに違いない。それか、坪井さんが体調を悪くして帰ったと、奇跡的にとてもうまく伝えてくれたのか、、、。不思議に思い、課長に一つ尋ねてみた。

「あ、もしかして坪井さんから聞いてましたか？」

その言葉を聞くと、課長はビクッと体を震わせて。

「もういいから戻ってくれ」と、か細い震えたような声で、直人に言ってきた。

おかしい。これは本当におかしい。

席について、今日の会社があまりにもおかしすぎるときになった直人は、隣の席の斎藤さんに、こっそりと何があったのか尋ねてみた。

すると、彼女はそっと耳打ちをする。

「あのね、坪井さん、金曜の夜川崎駅で飛び込んだらしいよ。」